北朝鮮のテレビ放送導入に関する一考察

―インフラの形成とコンテンツを中心に―

山下　英愛

Basic Research on North Korean TV Systems:

Focusing on the Formation and Content of Early broadcasting Infrastructure

Yeong-ae Yamashita

In this article, I will consider how the foundation of North Korean TV systems was formed. As a premise, I first described how TV broadcasting systems started. After the founding of the country, how was the new media of TV introduced and spread in North Korea, how was Kim Il Sung aiming to create a unique socialist system? What was its purpose? In addition, while the infrastructure of television broadcasting was formed, I examined how the contents of broadcasting were oriented.

The efforts to introduce TV broadcasting in North Korea began during the reconstruction period after the Korean War towards the beginning of the 1960s. Since then, the nationalization of television has been promoted, and infrastructure had been developed by the late 1970s. The introduction of the latest mass media, TV broadcasting, was for something more than improving people's cultural standards, but for the purpose of establishing the guidance system centered only on Kim Il Sung and building the system. Kim Jong Il, the successor, emphasized the "Uri-style", namely "our style", not only for the establishment of TV broadcasting infrastructure, but also for the contents of broadcasting, and exerted influence on the basic framework and direction of TV broadcasting.

はじめに

本稿の課題は、北朝鮮でテレビがいつ、どのような状況の下で、どのような目的で導入されたのかを整理することである。それを考察することが、金日成（1912-1994）から三代[1]にわたって唯一思想体系による支配体制を維持してきた国家におけるテレビの意味を理解するのに役立つと思うからだ[2]。韓国の先行研究では北のテレビ放送導入の経緯については短い言及があるだけで[3]、詳しい研究はほとんどない。

筆者はこのことを明らかにするために韓国ソウルにある北韓資料センター[4]を訪ね、北朝鮮で発行されている『千里馬』、『歴史科学』などの雑誌類[5]と、『労働新聞』及び同センターが所蔵する単行本をあたった。また、『金日成著作集』と『金正日選集』も入手して読んでみた。その結果、テレビについて言及しているいくつかの資料を入手することができた。だが、それらの資料はいずれも指導者中心の内容と定型的な記述で占められており、「事実」を知る上では大いに限界のあるものばかりであった。それにも関わらず、本稿ではそれらの資料に基づいてテレビ放送導入の過程及び特徴について整理することにする。それを通して、少なくとも北朝鮮ではどのように言説化されているのかを知ることができるからだ。その言説を読み解くこともまた、北朝鮮社会を理解する上で役に立つだろう。

そもそもテレビとは、受像機の製造と放送用アンテナ、送信網の設置

1　二代目：金正日（1941-2011）、三代目：金正恩（1984-現在）。
2　筆者は北朝鮮のテレビドラマとジェンダーに関する研究を進めており、本研究はそのための前提として位置付けている。
3　イ・ジュチョル（2012）「朝鮮中央TVの設備及び財政現況」（33-36）の中で簡単に触れられている。
4　北朝鮮関連資料を公開している韓国統一部傘下の機関（1989年開館）。資料収集はセンターのデータベース検索と雑誌・単行本の閲覧を併行して行った。
5　その他、『朝鮮芸術』、『芸術教育』、『電子工学』、『金日成総合大学学報 語文学』、『朝鮮女性』など。

とそれを支える電力、そして受像機を通して流れるコンテンツの発案から映像化まで、実に多くの人々による工程と高度な技術を要するものである。テレビ放送という最新のメディアは、1930年代半ばにドイツ、フランス、イギリス、ソ連、そして40年代初めにアメリカで始まっていた程度であり、日本で導入されたのも1953年になってからである[6]。植民地支配からの解放後、南北分断と朝鮮戦争を経て社会主義国家を建設しはじめたばかりの北朝鮮にとってテレビ放送の導入は、人民教化の道具とはいえ非常に高いコストと高い技術を要するものだったはずである。そのため、テレビ放送の導入に取り組むことは国家的なプロジェクトにならざるをえなかった。テレビに関する歴史的記述が指導者中心になる理由の一つもそのためであろう。

本稿ではそのような観点から北の資料を読み、その言説の内容を整理してみたい。第１章では、テレビ放送開始の経緯と普及の過程について見る。まず、テレビを導入するアイディアが金日成によって発案され、放送開始に向けた技術者たちを激励して成功に導く段階、次に、「全国のテレビジョン化」というスローガンのもとに、受像機製造工場の建設や放送網の拡大などを指示する段階、さらに、後継者としての道を歩み始めた金正日がインフラ形成に関与する段階についてまとめた。第２章では、金正日がテレビ放送の内容についてどのように考え、指導していたのかに焦点をあてる。彼はテレビ放送のインフラ形成と同時に放送コンテンツに深く関与している。その内容を彼の談話を通して分析する。

6 日本では1948年にNHKが公開実験を行い、1953年２月に放送を開始した。ちなみにラジオ放送は、植民地時代に朝鮮総督府によって設立された京城放送局（1927.2開局）があった。解放翌年の1946年５月、その施設を利用して北朝鮮側でも平壌放送（２年後に朝鮮中央放送に改称）が開局した（「朝鮮中央放送」、『韓国民族文化大百科事典』改正増補版2010）。ただし、北では1945年10月14日をラジオ放送の開始日としている。その日、平壌で「金日成将軍凱旋歓迎群衆大会」が開かれ、金日成の演説を実況中継したとされる。（ハン・ソンボク2005：80）。

金正日の考えはその後のテレビ放送の内容や方向性に大きな影響を与えたと思うからである。

第１章　北朝鮮のテレビ放送

１．テレビ放送開始の経緯

１）テレビ導入のアイディア

北朝鮮におけるテレビの導入は、筆者が目にしたどの資料にも金日成のアイディアとして紹介されている。キム・フンウォン[7]は、テレビの必要性を語る金日成の様子を次のように記している。「戦争の砲火が止んでまだ２か月も経たない1953年９月、全国が灰に埋もれていたその時」、金日成は「破壊された人民経済をなるべく早く復旧して人民生活を向上させ、その時に我々もテレビジョン放送を始めよう。（中略）そうすればわが国の人民はテレビを通して職場と家で座ったまま今日私たちが構想している祖国の未来を現実のものとして見ることになるだろう」（キム・フンウォン1980：41）。戦争直後の人民に希望を与えようとする指導者のイメージである。

その後、1957年に始まった第一次経済５か年計画は、千里馬運動[8]の勢いで１年短縮して達成することに成功する。そのさなか、金日成は再びテレビ放送に意欲を見せた。オ・ヨンシク（1989）によれば、1958年10月、金日成はある通信機械工場で製造されたラジオ製品を見ながら「今後、人民の生活が向上すればラジオでは満足せず、テレビを求めるだろう」と言い、技術者たちにテレビの製造を急ぐよう教示した（オ・ヨンシク1989：５）。そして1959年にはテレビの技術を習得させるため

7　当時の肩書は朝鮮中央放送委員会副委員長である。
8　労働力競争を通して生産増大を図ろうとした運動で、1958年頃から本格的に始まった（『韓国民族文化大百科事典』）。千里馬とは、一日に千里を走る伝説上の馬のこと（朝鮮の里単位で約400㎞）。

に５人の技術者をソ連に派遣したという[9]。

当時の北朝鮮ではラジオの普及も十分ではなかったが、韓国では一足早くテレビ放送の歴史が始まっていた。朝鮮戦争後、ラジオの復旧のために米国のRCA（Radio Corporation of America）社の機材の導入を斡旋した韓国の代理店が手数料の代わりに大量のテレビを仕入れてKORCAD-TVを設立し、1956年５月、「活動写真つきラジオ」の別名でテレビの試験放送を始めた[10]。このチャンネルをKBSが譲り受け、1961年12月31日KBSテレビが開局[11]したのである。

２）テレビ放送の開始

韓国のKBSテレビが開局したその日に北ではテレビの試験放送を初めて行った。韓国にみすみす先を越されるわけにはいかなかったのだろう。とにかく北でもテレビ放送の技術を開発し、試験放送するまでになったことを示したかったのかも知れない。だが、北の資料によれば、その質はまだ低いものだった。現地指導した金日成は、注意深く画面を眺めてから「画面が少し薄い」、「テレビジョンは本当に良いものだ」などと言い、「テレビ放送の物質的技術的土台をより強め、その技術水準を高めて、朝鮮中央テレビジョン放送をはやく始められるように」と激励し、開発のための配慮をしたという（無記名1998：２）。

北朝鮮でテレビ放送が始まったのは、その２年後の1963年３月３日と

---

9 「北韓のTV, 定着の歴史と流れを中心に」2017.2.27統一部公式ブログ（https://m.blog.naver.com/PostView.nhn?blogId=gounikorea&logNo=220945388961&proxyReferer=https%3A%2F%2Fwww.google.com%2F）閲覧日2020.1.7。

10 韓国行政自治部の報道資料「我が国のTV放送はどのように発展してきたか」2015.5.10（https://www.mois.go.kr/frt/bbs/type010/commonSelectBoardArticle.do?bbsId=BBSMSTR_000000000008&nttId=45674）2019.10.15閲覧。KORCAD＝Korea RCA Distributor（韓国RCA配給会社）。

11 KBSラジオは1927年に京城放送局として始まり、解放後の1947年、ソウル中央放送として再出発した。公営放送のKBS（韓国放送公社）となったのは1973年である。

言われている[12]。その間、開発のためにどのような道のりがあったのかはまったくわからない。ただ、手元の資料ではその日のことが次のように表現されている。技術者たちは「朝鮮中央テレビジョン放送を開始する万端の準備を整え」ており、金日成はこの時の試聴に「大いに満足」した（同上：３）。この日の放送は、画面に金日成の写真を掲げて「金日成将軍の歌」を流すことに始まり、簡単な報道、俳優たちによる歌と踊り、才談、寸劇など多彩な構成で２時間にわたって放映された（コ・ヨングク2006：11）。金日成は、受像機から流される映像を注意深く観察したあと、「画面もきれいで音声もとても良いと満足」し、これからは「映画をたくさん撮ってしばしば放送すればもっと宣伝もよくできる」、「テレビジョンは見て、聞いて、動きもあるのでとてもよい宣伝手段である」と語ったという（無記名1998：３）。また、テレビ受像機の普及と放送局の建設問題、技術者の養成についても教示したとされている（同上：３）。

２．「全国のテレビジョン化」

１）インフラの整備

1963年にテレビ放送を始めたとはいうものの、放送を実際に家々で見れるようにするためには受像機の製造と調達、中継塔の建設、電力の供給等々多くの課題があった。当時はラジオよりも先に有線放送が全国で実施されており[13]、60年代半ばには地方の農村の各戸に有線放送が入っていたという[14]。そうした中でテレビを普及する努力が続けられた。

12　当初の名前は平壌テレビ放送局だったが、1970年に朝鮮中央テレビと改称された。ちなみに韓国の研究者であるイ・ジュチョルは、北が実際に放送を始めることができたのは1969年であったと主張している（イ・ジュチョル2012：24）。

13　1965年には実質的に全国で有線放送が聞けるようになっていたという。カン・ヒョンドゥ（1989）『北韓の言論』乙酉文化社：158（イ・ジュチョル2012：28より再引用）。

1963年11月、金日成は放送関係部門指導者協議会で「全国のテレビジョン化はまずテレビジョン放送塔を建設することから始めること」と教示し、それを受けて翌12月に「テレビジョン放送事業を至急強化発展させることに関する党中央委員会と内閣の協同決定」が採択された（キム・フンウォン1980：41）。その後、放送塔が首都平壌に建設されたのが1967年であり、約10年間にわたって全国で中継所の建設作業が行われた（オ・ヨンシク1989：2-3）。また、テレビ中継所の建設が進んでいた平安北道[15]の方式を全国に広げるために、金日成が各道の党責任秘書[16]たちにその実現のための原則と方法を指示した（同上：３）。1969年３月に開かれた党中央委員会政治委員会では受像機の生産性を高めることを強調し、受像機生産関係部門の人々を集めて各道に受像機組み立て工場を建設し生産するよう指示したことなどが書かれている（キム・フンウォン1980：41）。

しかし、指導者がどんな指示を出したとしても、それを実現させるために第一線で働いたのは現場の人々である。その人々の努力によってテレビ放送の技術は徐々に向上する。当初、放送局の室内でのみ放送していたものが、劇場の芸術公演やサッカー場での実況中継などもできるほどになる。1968年９月には国家創建20周年中央慶祝大会を現地で実況中継することに成功した（同上：41）。

２）「全国のテレビジョン化」の推進

「全国のテレビジョン化」というスローガンは1970年に開催された朝

14 脱北者キム・テサンのインタビュー。「北韓有線放送の歴史（１）」Radio Free Asia、2017.11.3（https://www.rfa.org/korean/weekly_program/back_to_days/onceuponatime-11032017110019.html）2019.10.26閲覧。
15 平安北道は北朝鮮の西北部に位置する行政区で、平壌のある平安南道と隣接している。道は日本の県にあたる。
16 責任秘書は朝鮮労働党の役職の一つである。2016年から呼称が委員長に変更された。

鮮労働党第５回大会における金日成の演説でも言及された。金日成はその中で、「勤労者の文化、技術水準を高めるために、出版物の普及活動と放送宣伝活動を改善、強化し、とくにテレビジョン放送網をさらに拡大して、ここ数年のうちに全国のテレビジョン化を実現しなければなりません」（『金日成著作集』第５巻：247）と語っている。

北の資料によれば、その後も金日成は現地指導や関係者会議に出るなど、テレビ放送の推進に力を入れた。1971年１月には党中央委員会秘書局会議を招集し、「テレビジョン放送の本性と特性を全面的に分析し、それに合わせてテレビジョン放送の編集を改善するための具体的方法を提示」した（キム・フンウォン1980：42）。そこでは次のようなコンテンツに関わる指示も行っている。「テレビジョン放送は大衆を教育する手段なので、大衆教養の助けになる番組を放映するが、（中略）テレビジョン放送の特性を生かして政治宣伝と科学知識を普及しながらも芸術作品と実況をたくさん放映しなければならない」。また、同年５月にはテレビジョン放送会館を現地指導し、「テレビジョン放送の工程と設備を一つ一つ点検」（同上：42）したという。

脱北者の話によれば[17]、1960年代の中頃、学校で「これからは家でも映画を観れるような電気機器が出てくるが、それをテレビジョンという」などと教師が話すのを聞いたという。その内、金日成が「全国のテレビジョン化」を実現させることに関する教示を出し、そういうものを本当に作っているのか、と思ったという。

一方、1971年４月には対南（韓国）向けの宣伝扇動を目的とする開城テレビジョン放送を開局し[18]、３年後の1974年にはカラーテレビの放送も始まった。韓国の研究によれば、1971年と1976年の間にテレビの放

17　脱北者キム・テサンのインタビュー。「北韓TVの歴史」（１）https://www.rfa.org/korean/weekly_program/back_to_days/atthattime-12152017095623.html 2020.1.7. 閲覧。

送出力は４倍に増加し、テレビ電波の聴取可能地域が全国化した（イ・ジュチョル2012：34）。だが、受像機の普及は1970年代後半に10万台程度であり、上流層の専有物であったという（同上：37）。韓国ではKBSが1961年に国営テレビ放送を始めた後、東洋テレビ（1963）、MBCテレビ（1969）が次々と開局した。また、受像機の数も1961年の約２万台から、1968年には10万台、1972年には90万台と飛躍的な成長を見せていた（キム・スンヒョン他2001：29-30）。

３．金正日の関与

１）後継者の登場

ところで、「全国のテレビジョン化」が全党的に取り組まれた1970年代の初頭、北朝鮮は国際関係の緊張の中で独特の政治体制を築き、金日成の個人崇拝を強めた。1972年12月には唯一思想体系の理念である主体思想を憲法に明記している。またこの時期は、金日成の息子である金正日が革命歌劇「血の海」の大成功などでその存在を父親に印象付け、後継者としての道を歩み始めた頃でもある[19]。1964年に金日成総合大学を卒業して労働党中央委員会の組織指導部指導員として働き始めていた彼は、父が進めていた「全国のテレビジョン化」事業にも関与し始める。

興味深いのは、金正日の後継者としての地位が公になった1980年以降は、テレビ放送の歴史に関する記述にも変化がみられることだ。例えばキム・フンウォンの記事（1980）は、後継者としての地位が公になる

18 ラジオの対南放送は1967年に始まっていた。ちなみに、現在の北朝鮮のテレビ局は朝鮮中央テレビ以外に二つある。一つは1983年12月に開局した万寿台テレビジョン放送で、土曜日と日曜日に放送し、主に文芸番組を放送している。もう一つは1997年２月に開局した朝鮮教育文化テレビジョンで、社会文化生活と映画芸術などを放送している。

19 金正日は1974年に後継者に内定し、1980年第６次党大会で公式に後継者であることを内外に示した。1994年、金日成の死亡により権力を引き継いだ。（「金正日」『韓国民族文化大百科事典』参照）

直前だったため、その記述の中に金正日は一切出てこない[20]。ところが、後継者であることが公式に表明された後に発表された他の論文や記事には金正日に関する言及が随所に登場する。

何度か引用してきたオ・ヨンシクの論文（1989）は代表的である。この論文は題名からして金日成と金正日を併記している[21]。ここでは金正日が党の指導員となった1964年からテレビ事業の普及に邁進してきたかのように書いている。例えば、「親愛する指導者同志はテレビジョン放送塔も偉大な首領様が意図される通りに、我々の技術と資材でウリ式[22]に建設するよう働き手たちを覚醒させその実現のための闘争を賢明にお導き」になり、その「賢明な領導のもとにウリ式に立派に建設された」と結んでいる（同上：2-3）。中継所の建設についても同様で、金日成が教示すれば、それを金正日が細かく指示を出して成し遂げたと記している（同上：３）。

２）インフラの全国的整備

オ・ヨンシクの論文は、70年代の、金正日のインフラ整備に関する活動を詳しく紹介している。例えば、テレビ電波をより安定的に供給するための超短波中継所の建設に関しては以下のように記している。金正日は1974年１月末、「テレビジョン放送の影響範囲実態調査報告書」に基づいて関係者に対策を協議させた後、地方を訪問して超短波中継所の建設に関する課業を提示した（同上：3-4）。そして超短波中継所の建設を

20　この記事の最後は「我々は今日、全国のテレビジョン化の輝かしい歴史と大きな成果を感慨深く振り返りながら、今後のより輝かしい発展展望を胸に、わが党の第６次大会を迎えることになる」（p.43）と結ばれており、第６次党大会（1980年10月）前に書かれたものであることがわかる。

21　オ・ヨンシク論文が掲載されている『歴史科学』は1988年１号から巻頭論文の題目に金正日を言及するようになった（「歴史科学」『韓国民族文化大百科事典』参照）。

22　ウリ式とは我々式の意味。主体思想の中心的な考え方である。

党創建30周年（1978.10）までに達成せよと命じ、険しい山地での建設にはヘリコプターを使用するよう指示したという[23]。その結果1978年２月中旬には超短波中継所の建設を完成させることができた。この工事のために「全国の1037の機関、企業所から延べ108万余名」を動員し、「アンテナ鉄塔、超短波機械室、ディーゼル機関室、衛兵所建設に４万余トンの建設物を運搬」したとある（同上：４）。1974年に始まったカラーテレビの放映も金正日の指導によるものであるとする（同上：4-5）。金正日は技術者たちにカラーテレビの放送を「ウリ式」に創設することを指示し、金日成の62歳の誕生日（1974.4.15）に合わせて開始した。その他、受像機の生産についても、金正日が「全国的範囲で群衆的にテレビジョン受像機の生産を急ぐように指示」し、各道の党委員会で「テレビジョン受像機工場を現代的に建設し、生産を正常化するための具体的な方法」を討議させた（同上：５）。そして、平壌に大規模の受像機工場を建設し、「大同江」、「平壌」という銘柄の国産品を生産するようになったと書いている。その結果、「1974年には1970年の5.23倍、1980年代には13.86倍にな」り、「全国でテレビジョン放送の視聴が可能となった」。その実現は金正日が金日成の高い志を受け継いで打ち立てた「不滅の業績」だと称えている（同上：５）。「全国のテレビジョン化」事業に対する金正日の関与を称える言説は、権力世襲の正当化と重なっている。

このような独特の歴史記述の行間からわかることは、50年代末から始まったとされるテレビ放送の導入は容易なことではなく、かなりの時間と労力を要したということであろう。一例だが、先の脱北者のインタビュー番組によれば、70年代中頃、自分が属していた人民班（当時

23 金正日はその頃すでに労働党の中央委員（72.10）、書記局の組織・宣伝担当書記（73.9）の要職についていたが、翌月開かれた第８次全員会議で党中央委員会の政治委員会委員に選出（74.2）され、後継者としての地位を強固にする。

50 ～ 60世帯）で自宅にテレビのある家は３軒だった。テレビで映画を放映する日には大勢の人が家に押しかけて大変だったという。また工場の支配人や党秘書などの幹部は大会に出かけて行ってテレビをおみやげとしてもらい、自分は1979年度にもらったという。そして、「事実上、1980年代までテレビジョンは大衆宣伝手段として影響力を発揮しづらかった」と話している[24]。

第２章　金正日のテレビ論

１．放送の手法と目的

北朝鮮の放送を直接主管する部署は文化省の下部機関である朝鮮中央放送委員会である。だが、すべての放送を掌握しているのは朝鮮労働党の宣伝扇動部と組織指導部である。金正日は後継者として登場する過程で宣伝扇動部を管轄した経験があり、テレビ放送の初期から金正日が指揮をとっていたと言われる（イ・ジュチョル2012：23）。事実、彼はテレビのインフラ整備のみならず、コンテンツに関しても強い関心と影響力を持っていた[25]。本章では60年代から70年代にかけて「全国のテレビジョン化」がスローガンとして掲げられていた時期に、金正日がどのようにテレビ／放送について語り、介入していたのかについて見る。特に1964年から1972年までの金正日の談話の内容に注目してみたい。

１）「ウリ式」

まず、朝鮮中央放送委員会委員長との談話「放送事業で提起されるい

---

24 「北韓TVの歴史」（３）キム・テサンをインタビューする記者も脱北者である、この部分は記者の発言である。https://www.rfa.org/korean/weekly_program/back_to_days/fe-ms-12292017111040.html 2020.1.7. 閲覧。

25 金正日が映画好きだったことはよく知られており、『映画芸術論』（1973）や『主体文学論』（1992）を著すなど、芸術に強い関心を持っていた。

くつかの問題について」[26]（1967年）を見てみよう。この談話で金正日は、放送を「主体的に行うこと」が重要だと主張している。それは、放送事業を「我が党の要求と我が国の具体的実情、人民の思想感情に合うように」するという意味である（金正日選集１：287)。その例として放送編成を挙げ、次のように説明している。放送編成は「軍隊における作戦と同じ」であり、「作戦が良くなければ勝てない」。ところが、それが「ウリ式」になっておらず「他国がやるのと同じ」である。例えば、多くの人がテレビを見る夜の時間帯に外国の真似をして「外国の音楽作品」を放送しているが、それは「教条主義」である。夜は「政治宣伝物を中心に」放送を編成すべきだ。それも必要ならば「一日に十回でも二十回でも」放送すべきである（同上：288)。その弊害となる「事大主義や教条主義を徹底的になくす」ために、「放送部門関係者が党の政策でしっかり武装」せよと叱責調で述べている（同上：290)。つまり放送を主体思想を徹底させるためのものとして位置づけている。

２）放送の目的

金正日は放送の目的を、国内向けには「首領の偉大さを宣伝すること」、対南向けには「共和国北半部の発展相と社会主義制度の優越性に対する宣伝」（同上：291-293）が重要であるとした[27]。首領の絶対化を推進する道具として放送をとらえていたことは明白である。４年後（1971年）の同じく朝鮮中央放送委員会の委員長との談話[28]でも彼は放送に関わる働き手たちの「党と首領に対する限りない忠誠心」（同上：266）を強調している。すなわち、放送の「第一任務」は「首領様の偉大な革命思想

[26] 1967.7.30『金正日選集』（１）287-297。
[27] ラジオの対南放送はこの談話から５か月後の1967年12月に開始された。
[28] 「中央放送委員会活動を改善することについて」朝鮮中央放送委員会委員長との談話（1971.6.14）『金正日選集』（２）1993：265-270。

を内外に広く宣伝すること」であり、放送の役割は「党の路線と政策を貫徹する闘争に党員たちと勤労者たちを力強く奮い立たせる活動」である。「放送が党政策を敏感に引き受けて先に熱してこそ全国を熱することができ」る、と宣伝扇動の役割を強調した（同上：269）。

放送を通して首領の偉大さを宣伝せよという指示は繰り返し述べられている。1972年にテレビ放送部門の活動家たちに行った談話「テレビジョン放送の思想芸術的水準を高めることについて」[29]でも「敬愛する首領様の偉大性に対する宣伝」を行うために首領の「現地指導と対外活動」、「その他の様々な行事を収録した記録映画と録画番組」をたくさん放映せよと指示している。テレビ番組の内容を「党の政策に合わせ」、「偉大な首領の革命思想と教示、党の路線と政策を、説得力をもって解説し宣伝」に使用せよと述べている（金正日選集２：421-422）。金正日は74年２月に「全社会を金日成主義化せよ」と活動家たちに指示し、唯一思想体系を金日成個人への服従の方向へ導いたが（石坂浩一2019：72）、放送をその格好の手段として位置づけていたことがわかる。

２．放送技法・芸術論

１）放送技法

金正日は放送に対する以上のような考え方に基づいて、その技術的な側面についても具体的に指示した。一例として1971年の談話を見てみよう。ここでは放送員（アナウンサー）の話し方について言及している。彼は、放送員たちのレベルが低く、話術も「全体的に低い」。「話術に気迫と特色がなく、訴える力と戦闘性が弱い」と批判する。そして「報道する時と一般の記事を読む時、偉大な首領様の徳性と南朝鮮問題、国際

29　朝鮮労働党中央委員会宣伝扇動部及びテレビジョン放送部門活動家たちと行った談話：1972.8.22『金正日選集』（２）：419-431。

問題を扱う記事を読むときの話術」（金正日選集２：267-268）をしっかり区別せよと指示した。海外でもよく知られている朝鮮中央テレビの看板アナウンサー李春姫[30]がニュースで重大内容を報じる際に見せる、力強くて抑揚の効いた独特の話術は、この金正日の指示から作られたといえるだろう。放送員の話術については1972年の談話でも再度述べている。放送に出演する人たちが「原稿をもって棒読みすることが多いが、これは野暮ったい」とか、内容に合わせて扇動的に話したり、親しみやすく、柔らかく話すようにせよ、などと述べている（同上：424）。

また、テレビ画面や映像についても言及している。放送の内容が「単調」で「形象水準が低く」、「画面と音声の質も悪い」とし、例えば、サッカー中継は一本調子の画面ではなく、時には選手をクローズアップするなど工夫を凝らせと述べている。そして、音楽を利用したり、文芸編集番組の比重を高めて「人々の興味を引き付け、視聴効果を高め」よと指示した（同上：424-425）。

視聴者に与える影響にも触れ、テレビは「国の発展レベルと文明程度を総合的に見せてくれる鏡」であるから、「出演者たちの服装ひとつ言葉遣いのひとつ」にも気を付けて、「高尚な精神道徳的風貌と高い文化水準が表現されるようにせよ」と、述べている（同上：427）。

金正日のこうしたアイディアは、彼がその地位と立場を使って思う存分見ていたと思われる外国のテレビ放送からヒントを得ていたはずである[31]。あらゆる情報を指導者が独占することで権力を維持するという支

30 李春姫（1943年生まれ）は平壌演劇映画大学俳優科を卒業後、演劇俳優をしていたが、この談話とほぼ同じ時期（1971.5）に放送員となった。

31 1982年に韓国に亡命した金一族の姻戚にあたる李韓永（1960-1997）の手記『平壌「十五号官邸」の抜け穴』（ザ・マサダ1996）によると、金正日の長男である故金正男（1971年生まれ）はこどもの頃、韓国のテレビ番組を見るのが大好きだったという。金正日の官邸では韓国のテレビの他にも日本やロシアの放送なども鮮明に見ることができた。彼の執務室には６台のカラーテレビが壁にはめ込まれたビジュアル・モニター設備があったという（手記：90-91、110-111）。

配方式がここにあると言えるだろう。

2）芸術性

先述したように、金正日はテレビを「金日成主義」、「主体思想」を人民に浸透させるための宣伝扇動の手段として位置づけていた。そのため、放送に従事する人間は「高い政治思想性」をもち、放送内容にも同様の思想性を求めた。しかし、「思想性を高めるために芸術性を疎かにしたり、放送を堅苦しくしてはいけない」とも主張する。テレビが他の宣伝手段と区別されるのは、「芸術的形象」があるからであり、その手法を生かすべきだとしている（同上：422-423）。

その芸術性を高めるために、「テレビジョン映画、テレビジョン連続劇、テレビジョン小説をはじめ、テレビジョン放送の特性に合う様々な形態の文芸番組をたくさん創作して放映しなければならない」と述べた。以前、テレビ局を訪れた金日成は、「映画をたくさん撮って、しばしば放映すればよい」（1-2参照）と言っていたが、金正日はむしろ、「一般の映画館で見せるような芸術映画や舞台公演を録画したものだけ放映していては、文芸番組の多様性を保障できず、テレビジョン放送の芸術的特性を生かせ」ない。「いつも同じものを繰り返し放映するため、視聴者たちの間で」テレビの評判が良くない（426）。テレビではもっとテレビ固有のドラマを放映すべきだと披歴したのである。韓国ではちょうどこの頃、長編連続ドラマが大ヒットし[32]、それをきっかけにテレビ受像機が爆発的に売れるようになっていた[33]。そうしたことも自国のテレビ

32 「かえる夫」（全100話、MBC 1969-70年）、「若奥様」（全253話、TBC 1970-71年）、「女路」（全211話、KBS 1972年）、「新しいお母さん」（全411話、MBC1972-73年）など。

33 TV受像機の普及台数は、1969年末に22万台だったものが、73年末には130万台、75年末には206万台、77年末には380万台、そして79年末には596万台に上った（キム・スンヒョン他2001：62）。

放送の内容をもどかしく思った理由の一つだったかもしれない。

ところで、金正日がこの談話で示した「テレビジョン映画」、「テレビジョン連続劇」、「テレビジョン小説」という分類は、長い間、北朝鮮のテレビドラマの基本的枠組みとされてきた[34]。また、1973年には金正日がドラマの指導を直接行っていたことが資料を通してわかった。それは「日雇い爺さん」（품팔이 령감／５部作，1973）というドラマで、金正日は「作品の欠陥を一つ一つ指摘」し、テレビドラマの「水準を高める上で必要な理論実践的問題を具体的に明らかに」したという（キム・ヒョンボム1999：21）。ただ、実際にこのドラマが放映されたのかどうか、また70年代、80年代にどのようなドラマが制作されたのか、などについてはほとんど知られていない[35]。

おわりに

以上、北朝鮮におけるテレビ放送の導入に関する経緯を北の資料をもとに整理してきた。明らかになったことを挙げると次の通りである。①テレビ放送導入の努力は朝鮮戦争復興期の1950年代に始まり、1960年代初めに開局にたどり着いた。その後、全党的に「全国のテレビジョン化」を推し進め、1970年代後半には中継塔の建設や受像機製造工場の設立など、大まかなインフラが整った。②テレビ放送という最新マスメディアの導入は、人々の文化水準の向上という理由以上に、金日成を中心とする唯一指導体制の確立とその宣伝扇動に使用するという目的が大

34 金正日『主体文学論』（1992）の第６章４「文学のあらゆる形態を多様に発展させなければならない」（258-267）の中で詳しく論じられている。単純に言えば、テレビジョン映画は「行動芸術」としての映画的属性、テレビジョン劇は「セリフ芸術」としての属性、テレビジョン小説は朗読者の話術と言語による「描写文学」としての属性をもつというもの。これらを総称して「テレビジョン文学/劇芸術」と呼んでいる。

35 北朝鮮ドラマの最初の作品は1982年に放映された「あなたを知るまで」と言われている（「好評を得るテレビジョン劇創作団」『祖国』朝鮮新報社，2002．８月号：53）。

きかった。③金日成の息子である金正日も1960年代からテレビ放送の導入と放送内容や技法の指導を行った。その指示内容は唯一指導体制の強化と結びついており、それは彼の後継者としての地位を固めることにもつながった。北の資料の記述はそれを示している。④1970年代初めの談話では、テレビ放送の芸術面に関しても語っており、その後のテレビドラマの基本的な枠組みになったと思われる。

それらが具体的にどのようにドラマに反映され、北朝鮮ドラマの特徴を形作っていったのか、またそこにはどのようなジェンダー的特徴が見られるのか、などについては今後明らかにしてゆきたい。

参考文献

(一次資料)

金日成（1970）『金日成著作集』第１巻、未来社

金日成（1970）『金日成著作集』第２巻、未来社

金日成（1971）『金日成著作集』第５巻、未来社

고영국（コ・ヨングク）「위대한 령도자 김정일동지께서 김일성종합대학시기 우리 나라에서 텔레비죤방송체계를 창설하기 위한 사업을 현명하게 이끄신 불멸의 업적」『김일성종합대학학보 어문학』第52巻第３号、2006年［「偉大な領導者金正日同志が金日成総合大学時期わが国でテレビジョン放送体系を創設するための事業を賢明に導かれた不滅の業績」『金日成総合大学学報　語文学』］

김정일（金正日）『김정일선집』（１）조선로동당출판사，1992［『金正日選集』（１）朝鮮労働党出版社］

김정일（金正日）『김정일선집』（２）조선로동당출판사，1993［『金正日選集』（２）朝鮮労働党出版社］

김형범（キム・ヒョンボム）「우리 당의 현명한 령도밑에 개화발전하

는 텔레비죤문학」『조선예술』문학예술종합출판사、1999年５号［「わが党の賢明な領導のもとに開花発展するテレビジョン文学」『朝鮮芸術』文学芸術総合出版社］

김흥원（キム・フンウォン）「온 나라의 텔레비죤화를 위하여」『천리마』천리마사1980年10号［「全国のテレビジョン化のために」『千里馬』千里馬社］

오영식（オ・ヨンシク）「위대한 수령 김일성동지와 친애하는 지도자 김정일동지의 현명한 령도밑에 전개된 온 나라의 텔레비죤화를 실현하기 위한 투쟁」『역사과학』과학백과사전종합출판사，1989年第３号［「偉大な首領金日成同志と親愛なる指導者金正日同志の賢明な領導のもとに展開された全国のテレビジョン化を実現するための闘争」『歴史科学』科学百科事典総合出版社］

「텔레비죤방송의 새 력사를 펼치시여」『전자공학』과학기술출판사，1998年２号［無記名「テレビジョン放送の新しい歴史をお開きになる」『電子工学』科学技術出版社］

한성복（ハン・ソンボク）「방송의 력사」『예술교육』2.16예술교육출판사、2005年第２号［「放送の歴史」『芸術教育』2.16芸術教育出版社］

（二次資料）

石坂浩一編（2019）『北朝鮮を知るための55章［第２版］』明石書店

김승현，한진만（キム・スンヒョン、ハン・ジンマン）『한국 사회와 텔레비전 드라마』한울2001年［『韓国社会とテレビジョンドラマ』ハヌル］

문성휘，김태산（ムン・ソンフィ、キム・テサン）「북한유선방송의 역사（１）」Radio Free Asia, 2017.11.3［「北韓有線放送の歴史（１）」］（https://www.rfa.org/korean/weekly_program/back_to_days/

onceuponatime-11032017110019.html、2019.10.26閲覧）
이주철（イ・ジュチョル）『북한의 텔레비전 방송―텔레비전 정치와 인민의 갈등』한국학술정보，2012年［『北韓のテレビジョン放送―テレビジョン政治と人民の葛藤』韓国学術情報］
『한국민족문화대백과사전』（개정증보판）2010年［『韓国民族文化大百科事典』（改正増補版）］（https://encykorea.aks.ac.kr/）
한국행정자치부 보도자료（2015.5.10）「우리나라 TV방송은 어떻게 발전해 왔을까 ―행정자치부 국가기록원，'15년 5 월「이달의 기록」TV방송사―」［韓国行政自治部報道資料「我が国のTV放送はどのように発展してきたか―行政自治部国家記録院、'15年５月「今月の記録」TV放送史―］（https://www.mois.go.kr/frt/bbs/type010/commonSelectBoardArticle.do?bbsId=BBSMSTR_000000000008&nttId=45674、2019.10.15閲覧）
「호평 받는 텔레비죤극창작단」『조국』조선신보사，2002年８月号［「好評を得るテレビジョン劇創作団」『祖国』朝鮮新報社］

付記：本論文は科学研究費基盤研究Ｃ「北朝鮮ドラマとジェンダーに関する基礎的研究」（科研基盤研究Ｃ、2017 ～ 2020年度）」の一部である。